

病害虫発生予察情報予報第 2 号

佐賀県農業技術防除センター

I. 予報の概要および各作物の特記事項

作物名	病害虫名	6月の予想発生量 ^{注1)}		病害虫防除のてびきの記載頁 ^{注2)}	予報対象の病害虫 (抜粋)
		平年比	前年比		
水稲 (早期)	葉いもち	並	並	133~142 144~149	 いもち病  スクミリンゴガイ
	イネミズゾウムシ	やや多	やや多	170~171	
水稲 (早植え)	葉いもち	並	並	133~142 144~149	
	イネミズゾウムシ	並	やや多	170~171	
水稲 (普通期)	葉いもち	並	並	133~142 144~149	
	スクミリンゴガイ	多	やや多	176~172	
<p>1. スクミリンゴガイ 昨年、本種による被害が多くみられた。発生が多い圃場では浅水管理をしたうえで薬剤防除を行う。</p> <p>2. いもち病 苗でいもち病を確認した場合には、早急に取り除くとともに薬剤防除を行う。発生が多い地域では、長期残効型の育苗箱施薬剤を必ず使用する。</p> <p>3. トビイロウンカ 昨年、収穫期の遅い「さがびより」や「ヒヨクモチ」等で被害がみられた。被害を防止するために、育苗箱処理剤は、本虫に効果の高いチェス、デジタルバウアー等を使用する。その際、薬剤の効果を確認するため、基準量を処理する。</p>					
水稲全般	縞葉枯病 (ヒメトビウンカ)	並	やや多	165~167	
	<p>1. 縞葉枯病 (ヒメトビウンカ) コムギでのヒメトビウンカの発生量及びその保毒虫率は平年並であるが、常発地帯では、発生に注意する。</p>				

作物名	病害虫名	6月の予想発生量 ^{注1)}		病害虫防除のてびきの記載頁 ^{注2)}	予報対象の病害虫 (抜粋)
		平年比	前年比		
イチゴ (育苗圃)	ハダニ類	多	多	208~209	 ハダニ類
	うどんこ病	やや少	並	198~200	
	苗立枯症 (炭疽・疫病)	並	並	202~206	
	アブラムシ類	多	多	213~214	

	1. ハダニ類 一部圃場の親株でハダニ類の発生が多い。子苗での発生を抑えるため、古葉の葉かぎを行うとともに丸噴口等を用いて丁寧に薬剤散布を行う。なお、多くの圃場で主要薬剤に対する感受性が低下していると考えられるため（平成28年8月31日付け病害虫対策資料第9号参照）、育苗期間中の防除には、薬剤抵抗性の発達が少ないとされる気門封鎖系薬剤を活用する。ただし、本剤は殺卵効果がないため、成・幼虫を対象に3日間隔で複数回連続散布する。					
	2. 炭疽病、疫病、萎黄病 立枯性病害（炭疽病、疫病、萎黄病）については、ビニル雨よけや水滴の小さい灌水装置を利用して、水はねによる菌の飛散を防ぐ。また、炭疽病については、親株からの定期的な薬剤防除を徹底する。これらの発病株は、早急に圃場外に持ち出し適切に処分する。					
アスパラガス	茎枯病	並	並	323~324		ネギアザミウマ
	褐斑病	並	並	324~325		
	斑点病	やや少	少	324		
	アザミウマ類	多	やや多	327		
	ハダニ類	並	やや多	327~328		
	1. 茎枯病、褐斑病、斑点病 晴天日には施設開口部を開放し通風を図る。各病害に対し3週間間隔を目安として発生前から薬剤防除を実施する（前年多発生圃場及び既発生圃場、降雨日が続く場合は間隔を短縮）。特に、茎枯病については、降雨時にサイドビニルを降ろし雨の降り込みを防ぐとともに、発病茎は見つけ次第、除去し適切に処分する。					
2. アザミウマ類 平年及び前年に比べ本虫の発生が多い。若茎及び親茎への寄生や食害による被害を防ぐため、虫見板（約20×30cm）への払い落とし（擬葉部を2~3回叩く）により発生頭数を調査し、成虫が1ヶ所当たり3頭以上認められる場合は薬剤防除を行う。						

作物名	病虫害名	6月の予想発生量 ^{注1)}		病虫害防除のてびきの記載頁 ^{注2)}	予報対象の病虫害 (抜粋)
		平年比	前年比		
カンキツ	そうか病	並	並	218~220	
	かいよう病	並	並	222~224	
	黒点病	並	並	220~222	
	灰色かび病	やや少	やや少	224~226	
	ミカンハダニ	多	多	242~244	
	チャノキイロアザミウマ	多	多	236~242	
1. 病虫害全般 本年は温州みかんの着花量が少ない園がみられる。病虫害による減収を防ぐため、傷果・落果の要因となる各種病虫害の防除を徹底する。					
2. 灰色かび病 一次落果期（6月1半旬頃）に薬剤防除を行う。					
3. ミカンハダニ 一部圃場で発生が多い。殺ダニ剤に対する抵抗性発達を避けるため、4月~6月はマシン油乳剤の使用を基本とする。ただし、樹勢が低下している樹や着花が少ない樹では、マシン油乳剤の散布を控え、殺ダニ剤散布で対応する。					
4. チャノキイロアザミウマ 本虫の発生が多くなっている。イヌマキ、サンゴジュ等は本虫の発生源となるため、防風樹として植栽している園では特に発生に注意する。近年、第2世代成虫の発生ピークが6月上旬頃になっている。被害を防止するため、6月上中旬頃に薬剤防除を実施する。					
5. ミカンサビダニ 6月上中旬頃が重要な防除時期であるため、薬剤防除を徹底する。					

作物名	病害虫名	6月の予想発生量 ^{注1)}		病害虫防除のてびきの記載頁 ^{注2)}	予報対象の病害虫(抜粋)
		平年比	前年比		
ナシ	黒星病	並	並	287~290	 ナシ黒星病
	ナシヒメシンクイ	やや多	やや多	301~304	
	1. 黒星病 一部圃場で発生が多い。5~6月中旬までの薬剤防除は、原則的に保護殺菌剤を使用するが、既に発生している場合や長雨等で薬剤散布ができなかった場合はDMI剤を散布する。また、6月下旬~7月上旬は主要な伝染期となるため、DMI剤を用いた防除を必ず実施する。				
	2. スピードスプレーヤーによる薬剤散布 全列走行を基本とし、薬液が到達しにくい園周縁部等は手散布を実施するなど、丁寧に散布する。				
ブドウ	黒とう病	並	並	334~336	 ブドウべと病
	べと病	並	並	337~339	
	褐斑病	並	並	339~340	
	チャノキイロアザミウマ	多	多	346~347	
1. スピードスプレーヤーによる薬剤散布 全列走行を基本とし、薬液が到達しにくい園周縁部等は手散布を実施するなど、丁寧に散布する。					
2. 果粒の汚れ及び果粉の溶脱の防止 小豆大の時期までの防除を徹底する。袋かけ前(大豆大期)に薬剤防除を行う際は、果粒の汚れ及び果粉の溶脱が少ない薬剤を選定する。					
フルーツ キウイ	1. かいよう病 葉の斑点症状(右図参照)や赤褐色の樹液漏出痕の早期発見に努め、発見した場合には直ちに罹病部位を切除する。また、 全ての園において、感染防止のため6月まで銅水和剤又は抗生物質剤を主体とした定期的な薬剤防除を徹底 する。なお、幼木は成木に比べ発病しやすいため、薬剤防除を徹底する。(H29年1月24日付け病害虫対策資料第21号参照、防除対策の詳細は防除のてびきP365~366を参照)。				
果樹全般	果樹カメムシ類	並	並	かギツ: 248~251 ナシ: 304~305 ブドウ: 351	 チャバネアオカメムシ

作物名	病害虫名	6月の予想発生量 ^{注1)}		病害虫防除のてびきの記載頁 ^{注2)}	予報対象の病害虫(抜粋)
		平年比	前年比		
茶	カンザワハダニ	多	多	415~416	 カンザワハダニ
	クワシロカイガラムシ	並	やや少	422~423	
	チャノミドリヒメヨコバイ	並	やや少	420~421	
	チャノキイロアザミウマ	並	やや多	421~422	
	チャノココクモンハマキ	やや多	やや多	418~420	
	チャノホソガ	やや多	やや多	417~418	
	1. カンザワハダニ 一部圃場で発生が多い。二番茶の摘採に向け、園内の発生状況の把握に努め、発生があった場合は二番茶の摘採前使用日数に注意して薬剤防除を行う。				
2. ナガチャコガネ 二番茶の萌芽開葉初期(5月下旬~6月中旬頃)が、本虫の成虫発生初期にあたり、防除適期となるため、発生圃場では薬剤防除を徹底する。					
3. チャトゲコナジラミ 成虫の発生が見られなくなった頃(若齢幼虫期)が防除適期となるので、二番茶の摘採前使用日数に注意し、すそ部の葉裏を中心に薬剤防除を行う。					

- 注1) 予想発生量については、平年および前年との比較により記載しているため、実際の発生量とは相違を生じる場合があります。例えば、例年の発生量が少ない病害虫について「平年および前年より多い」と予想した場合であっても、実際の発生量は多くない場合があります。
- 注2) 防除対策については「[佐賀県病害虫防除のてびき](#)」も参照してください。
- 注3) [病害虫名に網掛けをしたもの](#)については、予報の根拠とした内容を記載しています。

6月1日～8月31日の3か月間は農薬危害防止運動期間です。 農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理を徹底しましょう。

◎水稻育苗箱に農薬を施用する場合は、**農薬が育苗箱からこぼれ落ちないように、畦畔等で行うか、育苗箱の下に不浸透性のビニルを敷く等の対策**をとりましょう。

◎ほ場のみならず、公共施設内の植物、街路樹及び住宅地に近接する場所において農薬を使用する場合は、**農薬の飛散が周辺住民や子供等に健康被害を及ぼすことがないようにしましょう。**

◎農薬やその希釈液、残渣等はペットボトル、ガラス瓶等の飲食品の空容器等へ**移し替えたりせず、施錠のされた場所に保管する**等、保管管理を徹底しましょう。

◎土壌くん蒸剤を使用する場合は、農薬の容器に表示された使用上の注意事項等に従い、防護マスク等の防護装備の着用、施用直後の**ビニール等での被覆等を確実に**行う等の安全確保を徹底しましょう。

II. 予報の内容・根拠等について

予報内容（来月の予想発生量）

- 平年（過去 10 年間）及び前年と比較し「少、やや少、並、やや多、多」の 5 段階で示しています。
 なお、少発生が予想される病害虫等については、予報の概要のみの記載となる場合があります。

予報内容の根拠

- 農業技術防除センターが実施する県内各地での調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生現況、気象予報からみた病害虫の発生条件等を基に、関係者による発生予察会議で決定します。
- 発生現況および気象条件が来月の病害虫の発生に及ぼす影響については、(－)：少発生、(－～±)：やや少発生、(±)：並発生、(±～＋)：やや多発生、(＋)：多発生として示しています。

防除上注意すべき事項

- 各病害虫を防除する上で特に注意すべき事項等を記載しています。なお、全般的な防除対策については「県防除のてびき」をご参照ください（1 ページの予報の概要にリンク有り）。

写真

- 1 ページ目：予報で対象とした病害虫を抜粋して掲載しています。
 6 ページ目以降：巡回調査時の各作物の生育状況を掲載しています。

6月の気象条件

- 病害虫の発生に関与する 6 月の気象条件については、福岡管区気象台発表の 3 ヶ月予報（平成 29 年 5 月 24 日）を基に、「気温：平年よりやや高い」、「降水量：平年並」と判断しています。

気象予報による要素別確率(%)及び病害虫の発生に関与する気象条件

要素	3 ヶ月予報における 6 月の気象予報（確率予報%）			病害虫の発生に関与する気象条件（平年比）
	低い(少ない)	平年並 (佐賀市の平年値)	高い(多い)	
気温	30	40 (23. °C)	40	やや高
降水量	30	40 (339 mm)	30	並

Ⅲ. 6月の予報

水稻（早期、上場地域）

巡回調査
5月22日



巡回調査圃場の様子

1. いもち病

- 1) 予報の内容
発生量：平年並（前年並）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ①巡回調査(図1参照)
発生株率：0%（平年0%、前年0%）
平年比：並<±> 前年比：並<±>
 - (2) 6月の気象予報
並発生の条件<±>
 - 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 補植用苗や畦畔に放置された残り苗は、葉いもちの伝染源になるので活着後に速やかに処分する。
 - (2) 葉いもちの発生が確認された圃場では、早急に防除を実施する。

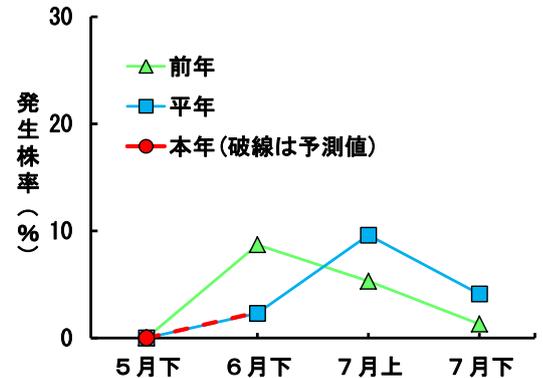


図1 早期水稻での葉いもちの発生推移

2. イネミズゾウムシ

- 1) 予報の内容
発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ①巡回調査(図1参照)
被害株率 36.0%（平年 29.1%、前年 24.7%）
平年比：並<±> 前年比：並<±>
 - (2) 6月の気象予報
気温がやや高く、やや多発生の条件<±~+>
 - 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 本田で成虫が10株当たり5頭以上みられたら、粒剤を散布する。



巡回調査圃場の様子

水稻（山間早植え）

巡回調査 5月22日

1. 葉いもち

- 1) 予報の内容
発生量：平年並（前年並）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ①巡回調査(図1参照)
発生株率0%（平年0%、前年0%）
平年比：並<±> 前年比：並<±>
 - (2) 6月の気象予報
並発生の条件<±>

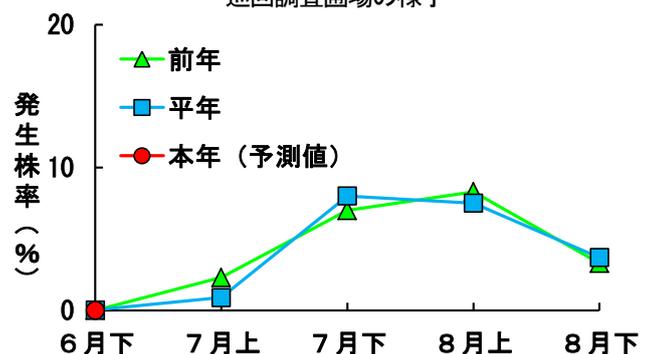


図1 山間早植え水稻での葉いもちの発生推移

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 補植苗や畦畔に放置された残り苗は、葉いもちの伝染源になるので速やかに処分する。
- (2) 葉いもちの発生が確認された圃場では、早急に防除を実施する。

2. イネミズゾウムシ

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査

食害株率0%（平年1.4%、前年0%）

平年比：やや少（一～±） 前年比：並（±）

(2) 6月の気象予報

気温がやや高く、やや多発生の条件（±～+）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 本田で成虫が10株当たり5頭以上みられたら、粒剤を散布する。

水稲（普通期水稲）

1. 葉いもち

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 前年の穂いもちの発生状況

平成28年の普通期水稲（10月上旬）での穂いもちの発生株率は、13.4%（平年13.0%）であり、平年並であった。（±）

(2) 6月の気象予報

並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 補植苗や畦畔に放置された残り苗は、葉いもちの伝染源になるので速やかに処分する。
- (2) 葉いもちの発生が確認された圃場では、早急に防除を実施する。
- (3) その他については、特記事項を参照する。

2. スクミリンゴガイ

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 越冬状況

①平成29年4月に調査した県内3地点の用排水路における平均越冬生貝率は55.0%と平年（44.2%）並であった。（±）

②水田内での越冬生貝率は、平成28年12月～平成29年2月の平均気温が7.63℃と平年（6.56℃）より高かったことから、平年よりやや多いと推定される。（図1.過去の冬期の気温と翌春の貝の越冬生貝率との解析の結果、両者の間に明確な正の相関が認められている。）（±～+）

(2) 6月の気象予報

気温がやや高く、やや多発生の条件（±～+）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 用排水路・クリークにおいて密度の高い地域では、貝及び卵塊を捕殺する。
- (2) 発生圃場では、浅水管理を徹底する。
- (3) その他については、特記事項を参照する。

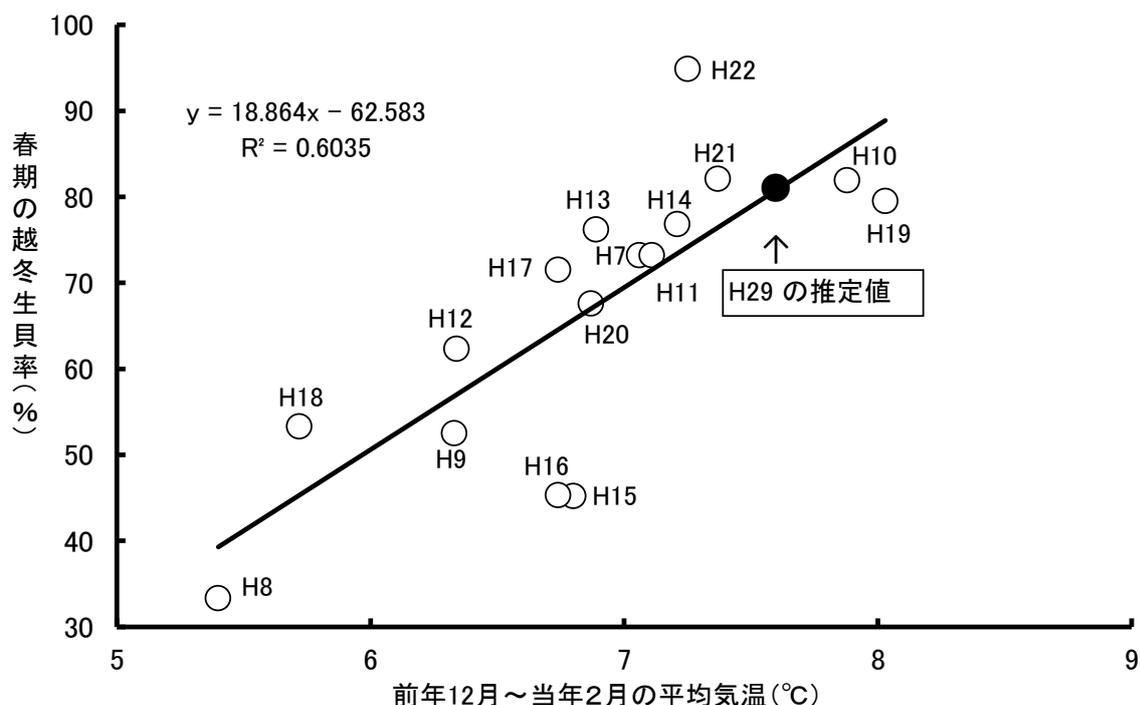


図1 冬期(12~2月)の平均気温と水田内でのスクミリンゴガイの越冬生貝率(4月)との関係
 ○: H7~H22の実測値(佐賀市の気温、川副町の同一水田における越冬生貝率)
 ●: H28年12月~H29年2月の気温を用いて上記の関係式から推定したH29年春期の越冬生貝率

水稻 (全般)

1. 縞葉枯病(ヒメトビウカ)

1) 予報の内容

発生量: 平年並 (前年よりやや多い)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査(早期水稻)

発生株率 0% (平年 0%、前年 0%)

平年比: 並(±) 前年比: 並(±)

②小麦における20回すくい取り(第1、2表参照)

ヒメトビウカ第1世代幼虫数 14.4頭 (平年 21.2頭、前年 68.0頭)

平年比: 並(±) 前年比: 少(←)

③小麦から採集したヒメトビウカのイネ縞葉枯ウイルス保毒状況(第1、3表参照)

保毒虫率 1.1% (平年 1.2%、前年 0%)

平年比: 並(±) 前年比: やや多(±~+)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 本病はヒメトビウカが媒介するため、ウンカ類を対象とした育苗箱施用剤を使用する。

(2) 発病株が認められた圃場では、発病株を抜き取るとともに、ヒメトビウカを対象とした薬剤防除を行う。

(3) その他については、特記事項参照。

第1表 各調査地点におけるヒメトビウンカの発生とイネ縞葉枯病ウイルス保毒状況（平成29年）

調査地点	小麦圃場でのヒメトビウンカの発生	ウイルス保毒状況	
	20回すくいとり虫数 (2圃場平均；5月15～18日)	検定虫数	保毒虫数
	頭	頭	頭
佐賀市1	10.0	27	0
佐賀市2	27.0	40	0
鳥栖市	1.5	23	0
神埼市	14.5	48	0
小城市1	7.5	38	0
小城市2	4.5	24	0
多久市	4.0	24	1
武雄市	9.5	20	0
鹿島市	42.0	51	2
吉野ヶ里町	8.0	35	1
白石町	29.5	48	0
平均	14.4	県内保毒虫率 $4/378 \times 100 = 1.1\%$	

第2表 小麦（黄熟期～成熟期）でのヒメトビウンカの発生状況（20回すくい取り幼虫数）

虫数	平成19年	20年	21年	22年	23年	24年	25年	26年	27年	28年	29年	平成
	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭
(県平均)	21.2	8.7	22.9	13.0	11.7	2.7	9.0	28.4	26.0	68.0	14.4	21.2

注) 5月中～下旬に、県内11～14地点の各2圃場ずつ調査を実施(平成28年の詳細は第1表参照)。

第3表 近年のヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率の推移

保毒虫率	平成19年	20年	21年	22年	23年	24年	25年	26年	27年	28年	29年	平成
	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%
(県平均)	2.1	0.9	1.6	1.3	4.2	0.9	1.0	0.0	0.3	0.0	1.1	1.2

注) 5～6月にヒメトビウンカを小麦圃場から採集して検定を実施(平成29年の詳細は第1表参照)。

イチゴ（育苗圃）

(巡回調査10圃場、
調査日：5月15日～22日、
親株を調査)



巡回調査圃場の様子

1. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査（図1参照）

発生株率：8.0%（平年1.7%、前年1.0%）

平年比：多（+） 前年比：多（+）

(2) 6月の気象予報

気温がやや高く、やや多発生の条件（±～+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 同一系統の薬剤の使用回数が増えないよう注意する。

(2) その他については特記事項を参照。

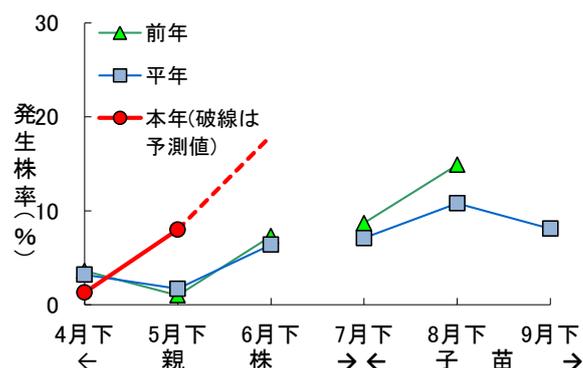


図1 ハダニ類のイチゴでの発生推移

2. うどんこ病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査（図1参照）

発生株率：9.1%（平年20.1%、前年10.3%）

平年比：やや少（-～±） 前年比：並（±）

(2) 6月の気象予報

並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 同一系統の薬剤の使用回数が増えないよう注意する。

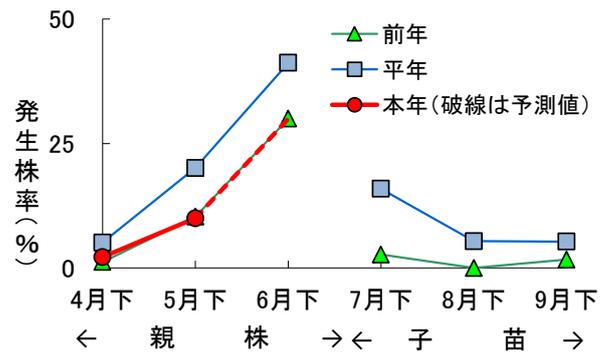


図1 イチゴうどんこ病の発生推移

3. 苗立枯症（炭疽病・疫病）

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 親株での発生の現況

①巡回調査（図1参照）

発生株率：0%（平年0%、前年0%）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

(2) 6月の気象予報

並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 降雨が多い梅雨期は、病原菌の飛散・感染に好適な時期であるため、防除を徹底する。

(2) その他については特記事項を参照。

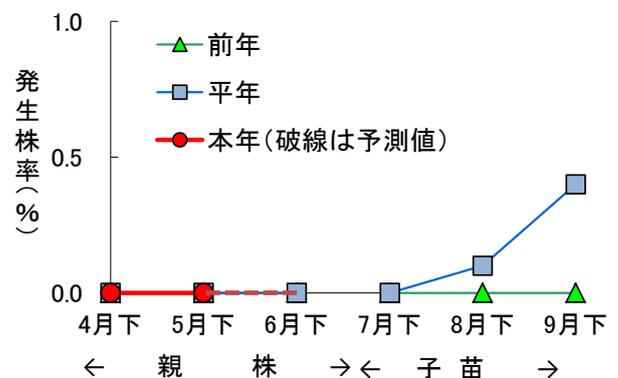


図1 イチゴ炭疽病・疫病の発生推移

4. アブラムシ類

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査（図1参照）

発生株率：32.4%（平年9.3%、前年2.0%）

平年比：多（+） 前年比：多（+）

(2) 6月の気象予報

並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 発生がみられる圃場では、防除を実施する。

(2) 圃場周辺の雑草は本虫の発生源となるため、除草を行う。

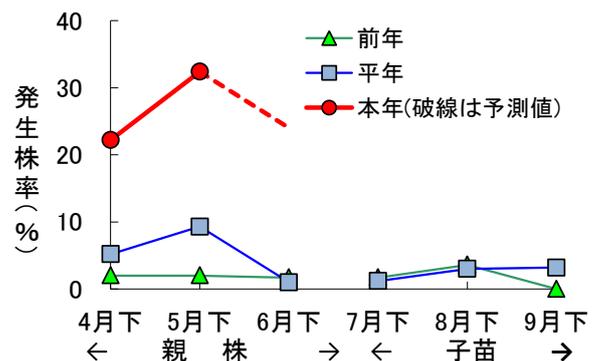


図1 アブラムシ類のイチゴでの発生推移

アスパラガス

巡回調査（7圃場）

調査日：5月15日～22日

1. 茎枯病

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）



巡回調査圃場の様子

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査 (図1 参照)

発生株率：0% (平年0.3%、前年0.1%)

平年比：やや少 (一~±) 前年比：並 (±)

(2) 6月の気象予報

並発生の条件 (±)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

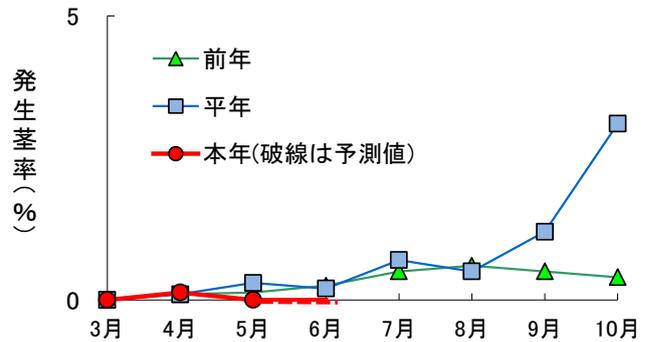


図1 アスパラガス茎枯病の発生推移

2. 褐斑病

1) 予報の内容

発生量：平年並 (前年並)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査 (図1 参照)

発生株率：0% (平年0.7%、前年0%)

平年比：並 (±) 前年比：並 (±)

(2) 6月の気象予報

並発生の条件 (±)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

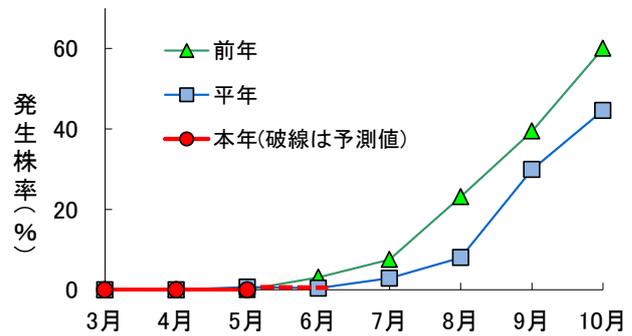


図1 アスパラガス褐斑病の発生推移

3. 斑点病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない (前年より少ない)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査 (図1 参照)

発生株率：0% (平年1.4%、前年4.4%)

平年比：やや少 (一~±) 前年比：少 (一)

(2) 6月の気象予報

並発生の条件 (±)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

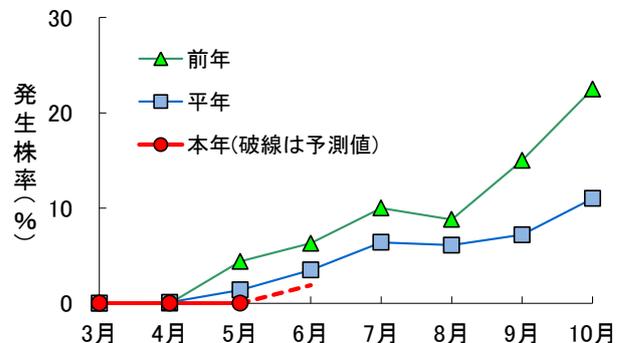


図1 アスパラガス斑点病の発生推移

4. アザミウマ類

1) 予報の内容

発生量：平年より多い (前年よりやや多い)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査 (図1 参照)

発生株率：49.3% (平年24.8%、前年14.4%)

平年比：多 (+) 前年比：多 (+)

(2) 6月の気象予報

気温がやや高く、やや多発生の条件 (±~+)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

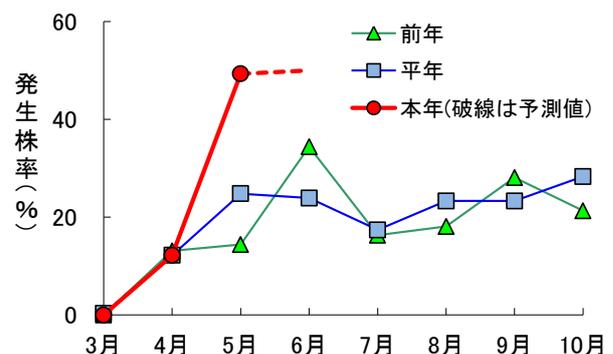


図1 アザミウマ類のアスパラガスでの発生推移

カンキツ

巡回調査 (8 圃場)
調査日 : 5 月 18 日 ~ 22 日



巡回調査圃場の様子

1. そうか病

1) 予報の内容

発生量 : 平年並 (前年並)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査 (図1 参照)

発生葉率 : 0% (平年 0%、前年 0%)

平年比 : 並 (±) 前年比 : 並 (±)

(2) 6 月の気象予報

並発生の条件 (±)

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 果実に薬害を生じる場合があるため、デランフロアブルとマシン油乳剤の混用又は近接散布は行わない。ただし、1 回目の散布から 200mm 以上の降雨があれば薬害を生じにくく、近接散布が可能である。

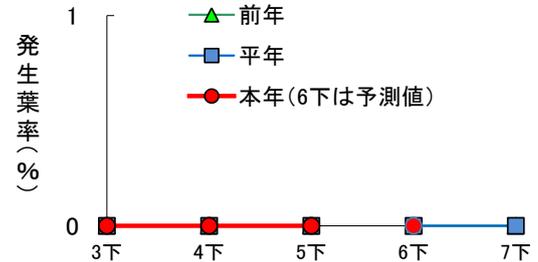


図1 カンキツそうか病の発生推移

注) 5月下旬までは旧葉を調査

2. かいよう病

1) 予報の内容

発生量 : 平年並 (前年並)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査 (図1 参照)

発生葉率 : 0% (平年 0.4%、前年 0%)

平年比 : やや少 (-~±) 前年比 : 並 (±)

(2) 6 月の気象予報

並発生の条件 (±)

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 前年発生園や、風当たりが強い園、罹病性品種 (ネーブル、はるみ等) の植栽園、新梢の伸長が遅くまで続く園 (幼木園、高接園、隔年交互結実栽培園等) では、無機銅水和剤 (クレフノン 200 倍加用) で定期的に防除を行う。散布間隔の目安は 20~25 日とする。
- (2) 発病した枝や葉は伝染源となるため除去し、処分する。ただし、強剪定は枝を遅くまで伸長させ、本病にかかりやすい期間を長くするため行わない。

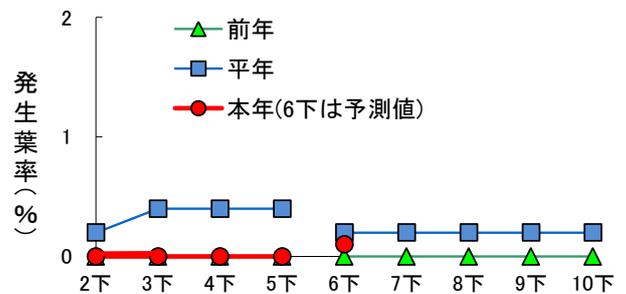


図1 カンキツかいよう病の発生推移

注) 5月下旬までは旧葉を調査

3. 黒点病

1) 予報の内容

発生量 : 平年並 (前年並)

2) 予報の根拠

(1) 6 月の気象予報

並発生の条件 (±)

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 果実に感染しやすい梅雨期に薬剤防除を徹底する。
- (2) マンゼブ水和剤散布後の次回散布時期は、積算降雨量が 200~250mm (マシン油乳剤加用の場合は 300~400mm) に達した時点を目安とする。ただし、同雨量に達しない場合でも、散布後 1 ヶ月を目途に次回の散布を行う。
- (3) 枯れ枝は伝染源となるため除去し、処分する。

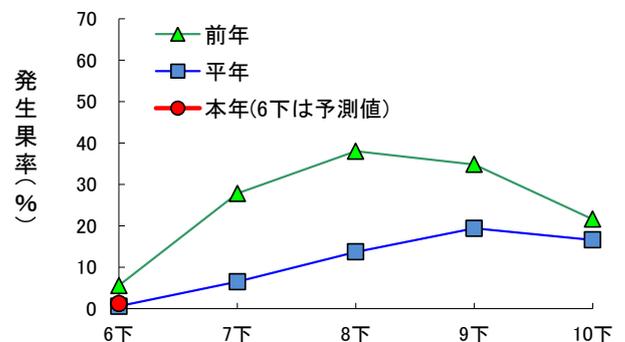


図1 カンキツ黒点病の発生推移

4. ミカンハダニ

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査（図1参照）

発生葉率：9.8%（平年5.9%、前年5.3%）

平年比：やや多（±～+） 前年比：多（+）

(2) 6月の気象予報

気温がやや高く、やや多発生の条件（±～+）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 低密度時（寄生葉率30%未満または1葉当たりの雌成虫の数が0.5～1頭）に防除を行う。
- (2) 殺ダニ剤に対する抵抗性の発達を避けるため、同じ種類の薬剤は年1回の使用とする。また、前年に使用した殺ダニ剤は使用しない。
- (3) その他については、特記事項を参照する。

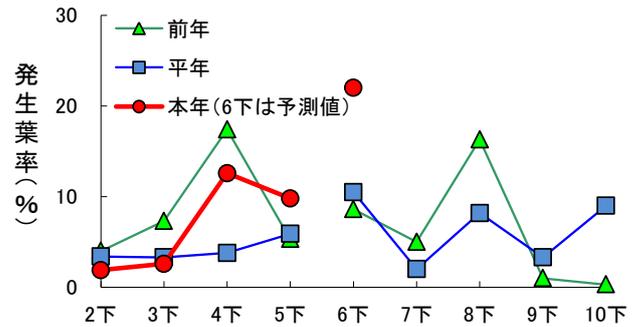


図1 ミカンハダニのカンキツでの発生推移

注) 5月下旬までは旧葉を調査

5. チャノキイロアザミウマ

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①黄色粘着トラップ（図1参照）

平年比：多（+） 前年比：多（+）

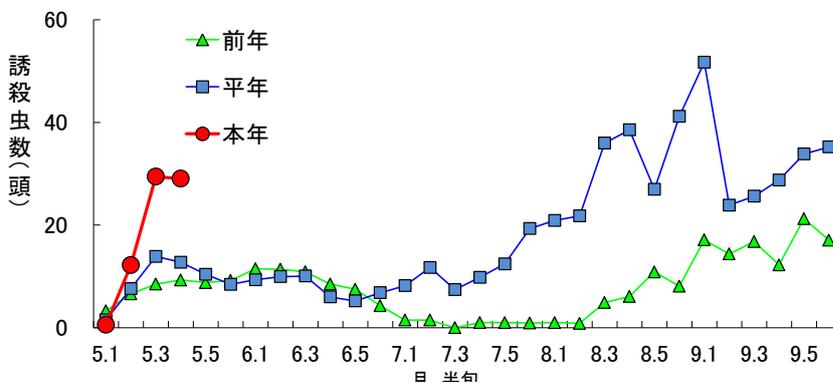


図1 黄色粘着トラップによるチャノキイロアザミウマの誘殺数の推移（果樹試験場調査）

(2) 6月の気象予報

気温がやや高く、やや多発生の条件（±～+）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 特記事項を参照。

ナシ

巡回調査（6圃場）
調査日：5月19日

1. 黒星病

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）



巡回調査圃場の様子

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査 (図1、2参照)

発生葉率：0.8% (平年1.1%、前年0.8%)
 平年比：並(±) 前年比：並(±)
 発生果率：1.3% (平年1.3%、前年0.3%)
 平年比：並(±) 前年比：やや多(±~+)

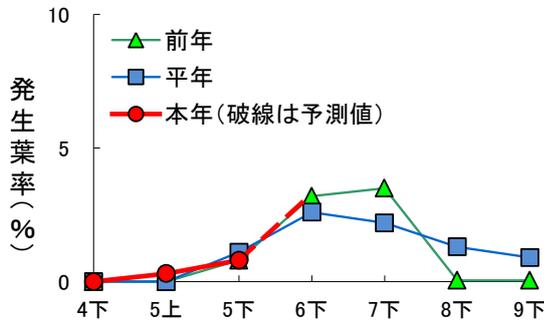


図1 ナシ黒星病(葉)の発生推移

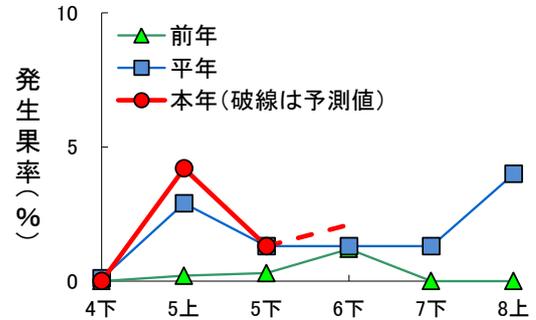


図2 ナシ黒星病(果実)の発生推移

(2) 6月の気象予報

並発生の条件(±)

3) 防除上注意すべき事項

- 発病葉や発病果実は伝染源となるため除去し、処分する。
- 曇雨天が続くと発生が多くなるので、天候を見ながら適切に防除する。
- その他については、特記事項を参照する。

2. ナシヒメシンクイ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い (前年よりやや多い)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①フェロモントラップ (図1参照)

平年比：並(±) 前年比：並(±)

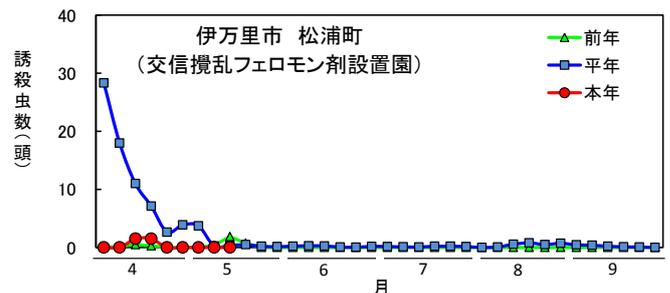
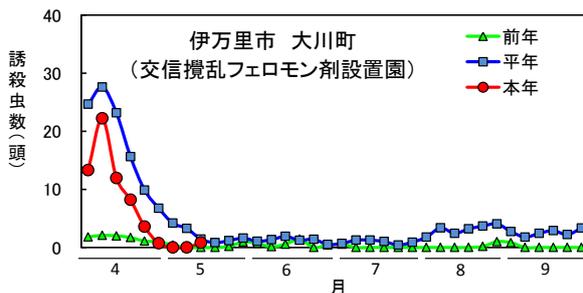
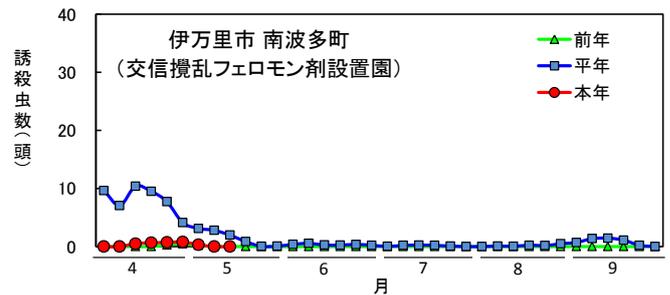
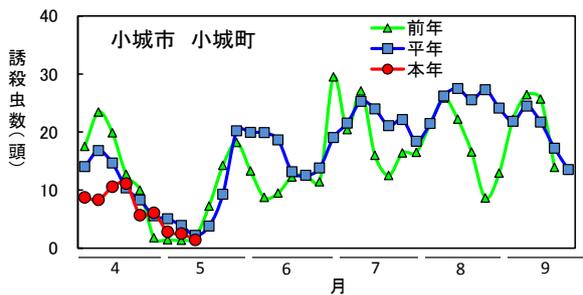


図1 フェロモントラップによるナシヒメシンクイの誘殺数の推移 (果樹試験場、西松浦農業改良普及センター調査)

①サクラに設置したフェロモントラップ（表1参照）

サクラに設置しているフェロモントラップ（伊万里市3ヶ所）での、4月第1半旬から5月第3半旬までの誘殺数は前年並（±）。

表1 サクラに設置したフェロモントラップにおけるナシヒメシクイの誘殺数（頭）
（西松浦農業改良普及センター調査）※4月～5月3半旬の合計値

地点名	H26年度	H27年度	H28年度	H29年度
伊万里市 南波多町	170	14	18	30
伊万里市 大川町	37	30	29	32
伊万里市 新天町	80	35	28	14

(2)6月の気象予報

気温がやや高く、やや多発生の条件（±～+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 交信攪乱フェロモン剤の設置を予定している園では、6月上旬までに設置する。

ブドウ

巡回調査（6圃場）

調査日：5月18日～22日



巡回調査圃場の様子

1. 黒とう病

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査（図1参照）

発生葉率：0%（平年0.1%、前年0%）

平年比：やや少（-～±） 前年比：並（±）

(2)6月の気象予報

並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 罹病枝の剪除と巻きひげの処分を徹底する。

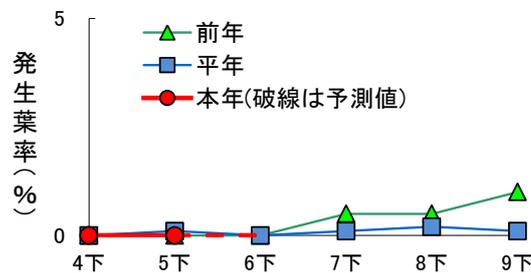


図1 ブドウ黒とう病の発生推移

2. ベと病

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査（図1参照）

発生葉率：0%（平年0.0%、前年0%）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

(2)6月の気象予報

並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 降雨により感染が進展するため、降雨前に薬剤散布を行う。

(2) ストロビルリン系殺菌剤（アミスターフロアブル、ストロビードライフフロアブル等）に対し耐性菌が発生しているため、本病の防除には使用しない。

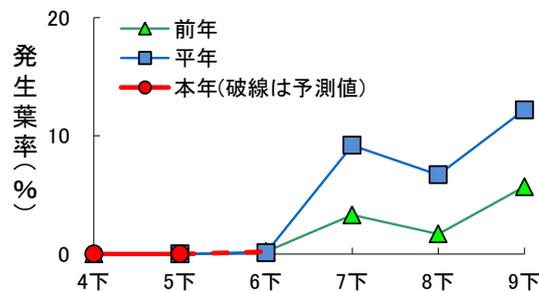


図1 ブドウべと病の発生推移

3. チャノキイロアザミウマ

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①黄色粘着トラップ（カンキツのチャノキイロアザミウマ（図1）参照）

平年比：多（+） 前年比：多（+）

(2) 6月の気象予報

気温がやや高く、やや多発生の条件（±～+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 6月中旬～7月中旬頃は主要な加害時期であるため、薬剤防除を徹底する。

(2) 袋内への侵入を抑制するために、袋の締め口をしっかりと締める。

果樹全般

1. カメムシ類

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) カメムシの越冬状況（H29年度対策資料第22号参照）

①越冬地点率：18.2%（平年38.6%、前年9.1%）

平年比：やや少（-～±） 前年比：やや多（±～+）

②平均越冬虫数：0.14頭/m²（平年0.23頭/m²、前年0.03頭/m²）

平年比：並（±） 前年比：やや多（±～+）

(2) 発生の現況

①予察灯（図1参照）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

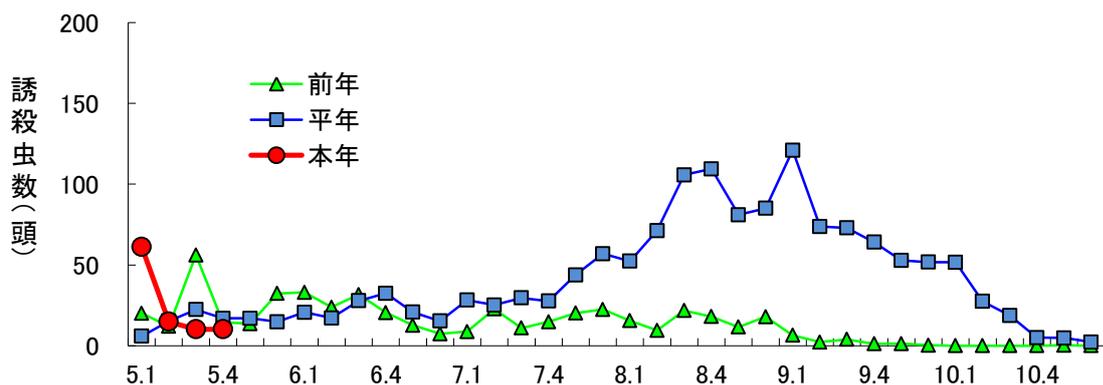


図1 予察灯（佐賀市、小城市、太良町）による果樹カメムシ類の平均誘殺数の推移

②フェロモントラップ（図2参照）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

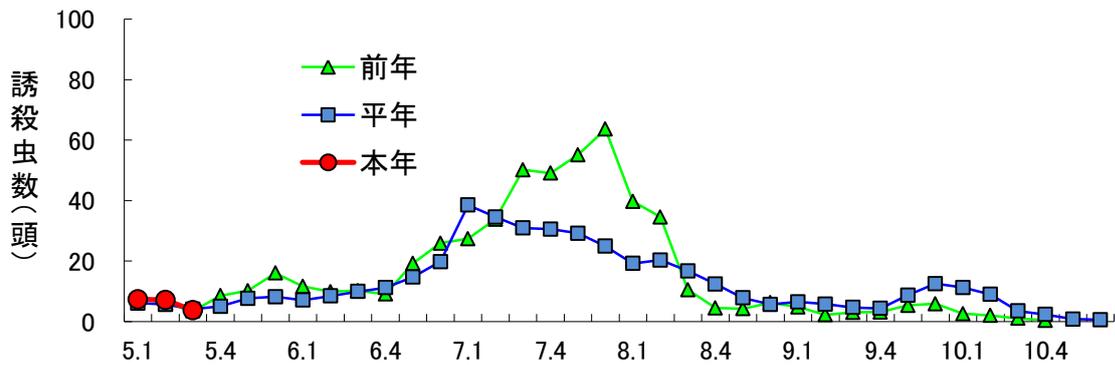


図2 フェロモントラップ（小城市、鹿島市、伊万里市、唐津市浜玉、唐津市鎮西、基山町）による果樹カメムシ類の平均誘殺数の推移

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 飛来状況は地域によって異なるため、園内をこまめに見回り、発生状況を確認する。
- (2) その他については、[H29年3月22日付け病害虫対策資料第22号](#)を参照。

茶

巡回調査（7圃場）
調査日：5月18日～22日



巡回調査圃場の様子（茶）

1. カンザワハダニ

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査（図1参照）

発生株率 8.3%（平年 5.1%、前年 2.6%）
平年比：やや多（±～+） 前年比：多（+）

(2) 6月の気象予報

気温がやや高く、やや多発生の条件（±～+）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 生息部位である葉裏へ薬液が十分にかかるように丁寧に散布する。
- (2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一薬剤は年一回の使用とする。
- (3) その他については、特記事項を参照する。

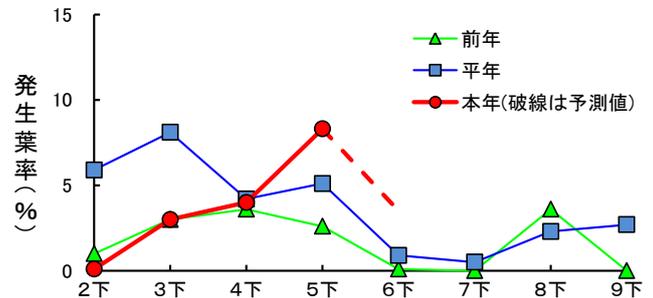


図1 カンザワハダニの茶での発生推移

2. チャノミドリヒメヨコバイ

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年よりやや少ない）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況（図1参照）

発生株率：1.1%（平年 3.2%、前年 3.1%）
平年比：少（-） 前年比：少（-）

(2) 6月の気象予報

気温がやや高く、やや多発生の条件（±～+）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 二番茶の開葉初期の防除を徹底する。
- (2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

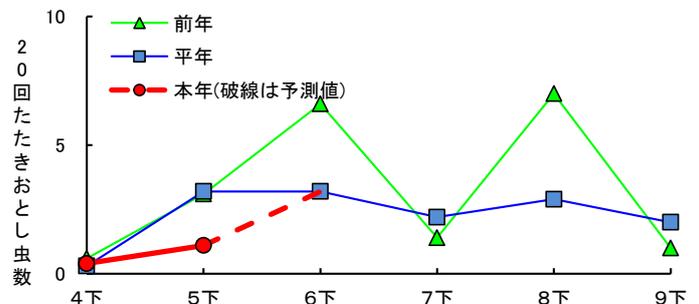


図1 チャノミドリヒメヨコバイの茶での発生推移

3. チャノキイロアザミウマ

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況（図1、2参照）

①発生株率：5.9%（平年8.3%、前年3.0%）

平年比：やや少（-～±） 前年比：やや多（±～+）

②吸引粘着トラップ

平年比：並（±） 前年比：並（±）

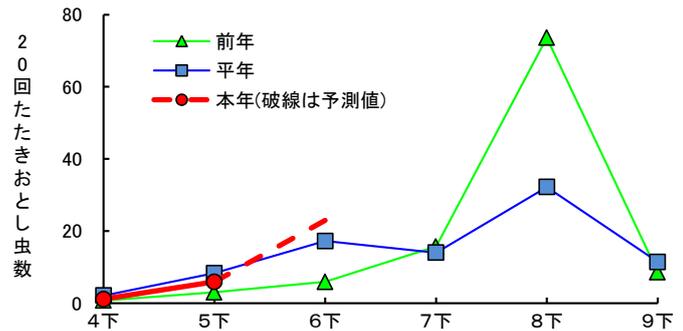


図1 チャノキイロアザミウマの茶での発生推移

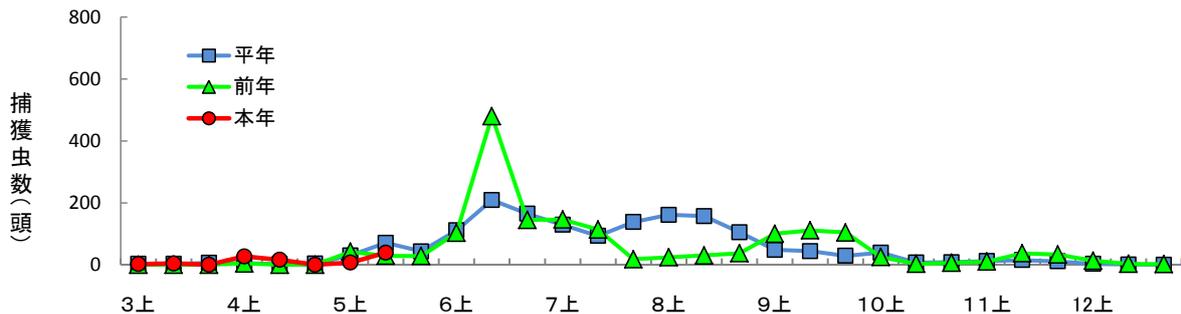


図2 吸引粘着トラップによるチャノキイロアザミウマの捕獲虫数の推移
（嬉野市嬉野町、茶業試験場調査）

(2) 6月の気象予報

気温がやや高く、やや多発生の条件（±～+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 二番茶の開葉初期の防除を実施する。

(2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

4. チャノココクモンハマキ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況（図1参照）

①発生株率：0%（平年0.0%、前年0%）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

②フェロモントラップ

平年比：並（±） 前年比：並（±）

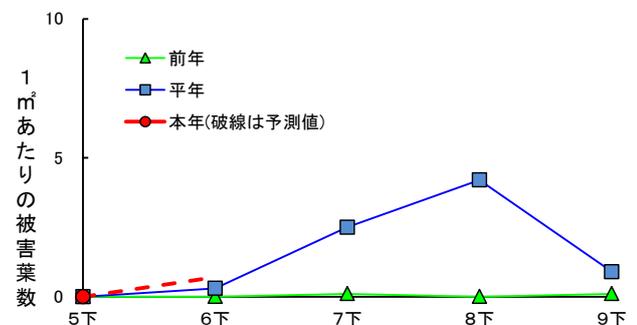


図1 チャノココクモンハマキの被害葉数の推移

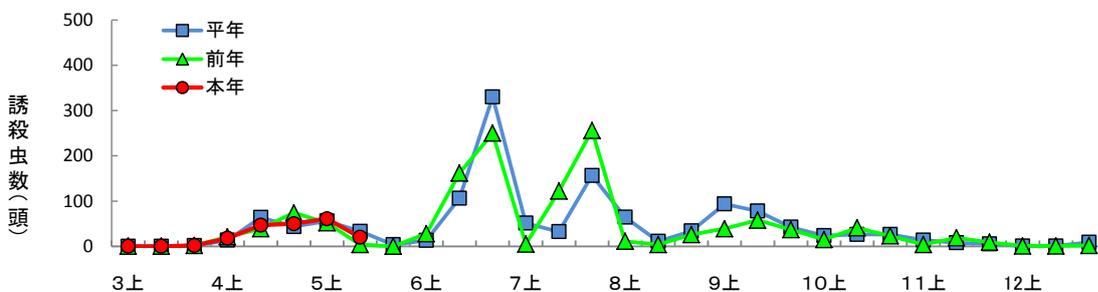


図2 フェロモントラップによるチャノココクモンハマキの誘殺数の推移
（嬉野市嬉野町、茶業試験場調査）

(2) 6月の気象予報

気温がやや高く、やや多発生の条件（±～+）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 二番茶期の防除は、茶の伸育状態によって摘採日を決め、摘採前使用日数に注意して薬剤を選択する。
- (2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

5. チャノホソガ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況（図1参照）

- ①発生株率：0.1%（平年1.8%、前年0.3%）
平年比：やや少（一～±） 前年比：並（±）
- ②フェロモントラップ
平年比：やや多（±～+） 前年比：並（±）

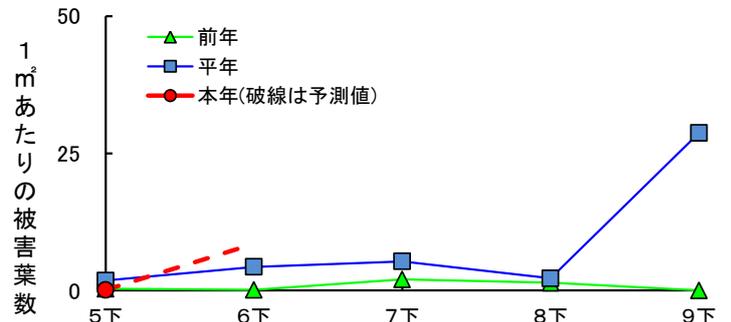


図1 チャノホソガの被害葉数の推移

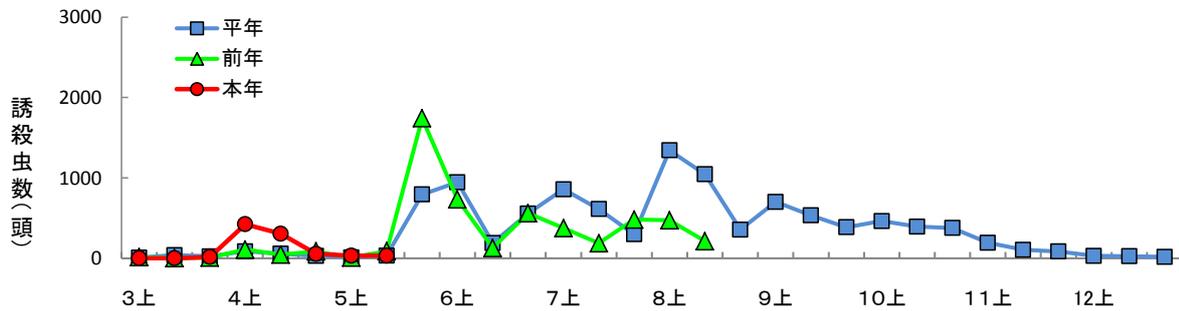


図2 フェロモントラップによるチャノホソガの誘殺数の推移
(嬉野市嬉野町、茶業試験場調査)

(2) 6月の気象予報

気温がやや高く、やや多発生の条件（±～+）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 二番茶の摘採が遅くなる園は、被害が多くなるおそれがあるので、開葉初期に防除を徹底する。
- (2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

連絡先：佐賀県農業技術防除センター 病害虫防除部
〒840 - 2205 佐賀市川副町南里 1088
TEL (0952) 45 - 8153 FAX (0952) 45 - 5085
Mail nougyougi.jutsu@pref.saga.lg.jp